
KEEP OUT **呵責の夏**

北川ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K E E P O U T 呵責の夏

【Nコード】

N 7 7 9 0 Q

【作者名】

北川ライム

【あらすじ】

もう、行くことは無いだろうと思っていたその土地を、21歳になった友哉は再び訪れた。

しかし、そこで友哉が出会ったのは“会はずのない”昔の級友だった。

むせ返る「夏」が、過ぎ去りし日の、少年達の幼い罪を蘇らせる。

ほのかな恋。未熟な性。抑えられない感情、葛藤。

それは、どこにでもある、思春期の通過点のはずだった。

割れるような蝉時雨と、ヒラヒラと飛翔する黒い蝶の羽の下で、
友哉が見たものは何だったのか。

第1話 夏の幻

グリーンのローカル列車を降り、一人駅のホームに立った大村友哉は、体にまとわりつく暑さと、沸き立つ蝉の声に目眩を感じた。そして同時に、8年ぶりにここに帰ってきてしまった自分にウンザリした。

無人の改札も、雨に晒され色あせてしまった駅舎の壁も、何一つ変わっていない。

時間があの頃から止まっているかのようだ。

太陽に炙られ立ちのぼる土の匂いと草いきれが、鼻孔を刺激する。逆らうように息を吐き出した。

その懐かしい匂いと共に、どうしようもなく蘇ってくる少年期の記憶は、友哉にとって苦痛でしか無かった。

「へえ、友哉、田舎で同窓会なのか。いいな、オレ両親ともこっただし、ジジババいないから田舎なんて無いんだ」

帰る前の日、大学の友人がそう言っけうらやましがった。

「別にそんないい所じゃないよ。ただの辺鄙な山の中さ。遠いし、帰るだけでぐったりする」

謙遜ではなく、その時友哉は本当にそう思った。

12歳になるまでそこで育ったというのに、まるでその土地に愛着が無かった。

“ 本当は二度と行きたくない場所なんだ。”

すっかりそう言いそうになったのを友哉は堪えた。

「どうして？」

などという質問が来たら堪らない。

思い出すのも説明するのも真つ平だった。あの夏の思い出が、今な

お友哉を苦しめる。

両親の都合で8年前神奈川に引っ越し、こことは無縁になった今でも、夏になり蝉の声を聞くと胃の辺りが締め付けられるように痛くなる。

友哉は草の手入れも行き届いてない駅のロータリーで、バスの時刻表を確認した。

1日6本しかないのを見てウンザリした。昔はもう少しあったはずだ。

観光名所の滝が水不足と崖崩れで見劣りするようになり、観光客が減ったと祖母に聞いたことがある。

それが村をさらに過疎化させて行っている。

友哉は首筋の汗を手の甲で拭くと、ボストンバッグを肩に担ぎ、歩き出した。

2時間もここでバスを待つよりも1時間かけて歩いた方がマシだった。

相変わらずワシャワシャとうるさい蝉の声に苛立ちながら、友哉は今やすっかり寂れてしまった駅前商店街を抜けて村へ続く県道脇を歩いた。

いくぶん空が陰ってきた。

心地よい風が一瞬だけ、道沿いに流れている川から吹き上がってくる。

サラサラと、土手の桜の青葉が乾いた音を立てた。

サラサラと、記憶の中の少年の栗色の髪が風にゆれる。

白く細い首をした華奢な少年が、友哉の方を振り返りニコリと笑う。ズキンと胸に太い針を刺された様な痛みが走り、我に返った友哉はブンと頭を振って妄想をかき消した。

「冗談じゃない！」

何かを吹き飛ばすように友哉は叫んだ。
だから嫌だったんだ！ だから来なくなかったんだ！
俺が何をしたって言うんだ。どうしてこんな思いをしなきゃいけないんだ。

友哉は眉間に皺を寄せて向きを変え、来た道を戻り始めた。

祖父母には体調が悪くなったと言えいい。同窓会なんて出なくなつてかまわない。

友哉は競歩の選手さながらの勢いで駅に向かった。

「来るんじゃないかった」

もう一度そう呟いたとき、思いがけず川の方から土手を上ってきた人影とぶつかりそうになり、

友哉は驚いてポストンバッグをアスファルトの上に放り出した。

「あぶなっ！」

短く叫び、その不注意な人物に注意しようと睨みつけた瞬間、友哉の全身が凍り付いた。

灼熱の太陽が再び照りつけ始めたというのに、体が震えた。

“そんなはずはない”

友哉は驚きのあまり口を半開きにしたまま、一歩後ずさった。

友哉にぶつかりかけた青年は目を丸くして驚き、右手で胸を押さえながら「ごめんなさい」と謝ってきた。

サラサラとやわらかそうなストレートの栗色の髪。

友哉と同年代か少し下だと思われるが、体つきはとても細く、あまり日にも焼けていない。

中性的で柔らかな綺麗な顔、白い首筋。

友哉を見つめる瞳は、日本人と思えないほど緑がかったうす茶色だった。

動転しながら友哉が地面に落としたバッグを拾おうと手を伸ばすと、その青年が先に拾い上げて渡してくれた。

無言でバッグを受け取った後、友哉はぶしつけなほどその相手を凝視した。

記憶の中の少年と、驚くほどシンクロしたその青年を。

全身から冷たい汗がにじみ出た。

青年はただ、静かに友哉を見つめ返す。

友哉の様子に気味悪がっているのか、それとも何かを企んでいるのか。

興奮している友哉には想像する余裕もなかった。

友哉の記憶の中の少年がそのまま、この自然に優しく育まれ成長したとしたら、それはまさに今、目の前にいる青年そっくりになっていることだろう。

けれど、そのはずは無かった。そんな夢みたいな事が起こるはずなかった。

彼は死んだのだから。

あの可愛そつな少年、由宇^{ゆう}は9年前の夏、死んでしまったのだから。

第2話 優しい空間

「よう来たねえ、友哉。疲れちゃったやろ。汗だくじゃあね。風呂焚いてあるけえ、先に入ったらええ」

駅から歩いてきたという友哉を、久しぶりに会った祖父母はとても優しく迎えてくれた。

祖母のカナエは小さな体を揺すって相変わらずよく笑い、祖父の幸次郎はフサフサした真っ白い髪が雛鳥のように見える、穏やかで無口な人だった。

小6まで友哉は両親と、この祖父母の5人でここに住んでいたのだが、父の急な転勤で友哉親子3人はその冬、神奈川に引っ越した。

当然祖父母はこの家に残るはずだったが、父親の弟夫婦が突然祖父母を引き取ると言い出し、無理やり福岡に連れて行ったのだ。

「福岡の叔母さんに三つ子の赤ちゃんが生まれたやろ？ きつと、じいちゃんばあちゃんに世話して欲しいんよ」

母が少し苦笑しながら言ったのを友哉はぼんやり覚えている。

祖父母がどこに住もうと別れて暮らす事に変わりは無く、寂しい気持ちも変わらない。

けれどその時一番に思ったのは別の事だった。

寂しさよりも、「帰るべき田舎がなくなる」という安堵だ。

その夏起こった出来事と決別できるという安堵だ。

すべてを記憶の隅に追いやることができる。

もう二度と、あの滝のほとりの近くを通らなくて済む。そう思った。ところが今年の冬。

福岡のマンション暮らしに耐えきれなくなった祖父母は、またこの家に戻ってきたのだ。

福岡の叔母は、三つ子が成長しマンションが手狭になってきたこともあり、気前よく二人を送り出した。友哉の「田舎」が再び復活した。

「ほんと、大きゅうなつたねえ、友哉。何センチあるん？」

「175センチしかないよ」

「肩もガツチリしちよるし、髪の毛も今時やね。かつこええやん、大学じゃ女子にもてるんやないん？」

75歳になるカナエはコロコロと笑いながら、少女のように高い声で喋った。

幸次郎も嬉しそうに友哉を見て頷いている。

「そんなことないよ。うちの理学部は女の子が少ないんだ」

友哉はクーラーのない畳の居間で、体に扇風機の風を直に当てながら、この懐かしい空間に満たされていた。

土間から続く台所と居間は、不思議と外の猛暑を遮断してひんやりしている。

蝉の声が少しおさまり、代わりに辺りの田圃からせわしなくカエルの声が聞こえはじめた。

平和そのものだ。何を不安がる事があるだろう。

自分はなぜ昼間見たあの青年にそれほど驚いてしまったのだろう。時間が経ち、冷静になるにしたがって自分が滑稽でならなかった。

あの後、あの青年はもう一度友哉に頭を下げると、のんびりした足取りで商店街の方へ消えて行った。

何となく毒気を抜かれたような放心状態になった後、友哉は自分の短気が馬鹿らしくなり、祖父母の待つ家へ引き返した。

よく似た人間などこの世にたくさん居る。しかも友哉が見たのは自分と同じか、もしくは十代の少年だ。

11歳の、あのままの姿ではない。

なぜ一瞬でも由宇だと思ったのだろう。考えれば考えるほど、自分が滑稽になる。

確かに由宇の死体は見つからなかった。

川の遙か下流の淀みで、由宇がその日履いていたサンダルが見つかっただけで。

消防団や青年団の大人達がどれほど川や滝壺をさらえても、死体は見つからなかった。

けれども、彼の死はまぎれもない事実なのだ。

その事実が、村全体にどうしようもないやり切れなさと不安と、心を浸食して行く恐ろしさだけを残した。

思わなかった訳ではない。もしかしたら由宇は生きているんじゃないだろうかと。

ただ、騒動の後出ていくのが気まずくて、息を潜めているんじゃないだろうかと。

そう思うことで自分が慰められた。

けれどそれがバカバカしい現実逃避だと言うことも、11歳の友哉には分かっていた。

「明日同窓会なんやろ？ あの小学校の校庭借りてするうちゅうたなあ。早う寝んとえらいが」

三角に切ったスイカが乗った皿をテーブルに置きながら、カナエが言った。

甘い果実の匂いが喉の渴きを思い出させた。

「うん。でも夕方からだから大丈夫。先に寝ててよ、二人とも」

「そうかあ？ 友哉も早う寝えや。・・・じゃけど寂しゅうなるねえ。あの小学校も今年いっぱいで廃校なんてなあ。昔はもう少し子供もおったのに、今は若い人は皆よそに行きよる」

この村は年寄りばかりになる、とカナエはウンザリしたようにため

息をついた。自分は年寄りの中には入っていないような口振りだ。友哉は笑ってカナエに言った。

「仕方ないよ。そういうもんだから」

- - - 消えてなくなればいい。

唐突にそんな思いが胸を突き上げてよぎり、友哉はドキリとした。

- - - あんな学校も、級友も、記憶も。みんな消えてなくなればいい。
- - -

それは9年前の自分の叫びだ。

今ではない。

きっとそうだ。

自分の本心を探ることが恐ろしくなり、友哉は苦しげに息を吐き出した。

第3話 忘れるために

友哉の元に同窓会の案内ハガキが届いたのは3週間ほど前だった。今年で廃校になる小学校に集まり、同窓会をしようという趣旨の誘いだ。

それぞれの年度生で日にちをずらしながら校庭に集まり、バーベキューでもしようというものだった。

「物好きな奴らだな」

と、すぐさまハガキをゴミ箱に捨てたが、運悪く母親に見つかってしまった。

「ちようどいいじゃない、行ってきたさいよ友哉。せっかくじいちゃん達もあそこに戻ってきたんだし。この夏、母さん達は仕事で行ってあげられないしさあ。友哉が行ってあげたらきつと喜ぶよ二人とも」

もともと関東出身で方言もすっかり抜けた母が、自分の名案に嬉々として言った。

それは実際同窓会うんぬんよりも、親の思惑だったわけだが。

友哉にも仲が良い友だちがいないわけではなかった。

5年生まではごく普通のやんちゃな少年だった。

夏休みともなれば友だち数人と連れ立って、近くの遊泳所に指定された川で真っ黒になるまで泳ぎ、

山で作った秘密基地では、誰かが家から持ってきた成人向け週刊誌をドキドキしながら覗く、ごく普通の少年期を過ごした。

そう。6年生の春に、あの双子の姉弟が転校して来るまでは。

友哉は布団に転がりながら、磨りガラスと障子を抜けてくる月明かりをボンヤリ見ていた。

体はぐったり疲れているのに、頭が冴えて眠れない。

もう最後にしよう。

もう一度ここに来て思い出と決別しようと思った。

結局この地を遠く離れても、忘れることは出来なかった。

もう一度あの場所に行つて、花でも供えて、そしてすべて終わらせるんだ。

友哉は目を閉じた。

どこかでチリンと風鈴の音が聞こえた気がした。

6年生の春。

友哉のクラスに、8月いっぱいまでということで転入してきたのは双子の姉弟だった。

1学年1クラス。それも男女会わせて21人しかないクラスにとつては、センサーシヨナルな出来事だった。

たった一学期間とはいえ。

そして、その双子の姉、保奈美は息を呑むほど美しい少女だった。

「東川保奈美さんと、弟の由宇君です。ご両親の都合で2学期が始まるまでの滞在となるそうです。短い間ですが、皆さん仲良くしてあげてください」

担任の女教師がそう説明する間も、クラス全員が姉の保奈美に釘付けになっていた。

女子までもが、だ。

背丈は女子にしてはかなり高く、スラリと伸びた手足はとても白くしなやかで、バービー人形を思わせた。

癖の少しもないストレートの長い黒髪は、薄いブラウス越しにふっくら膨らんだ胸に、軽くかかっている。

黒目がちの美しい目は、凜として少しも臆すること無く、新しいクラスメート達をまつすぐ見つめていた。

教室は水を打ったように静かになり、友哉は少しの間、息をするのも忘れた。

雑誌やTVで見るモデルやアイドルにも、これほどまでに心を震わされたことはなかった。

しなやかな細い体から放たれるのは、今まで机を並べてきた女子たちとは明らかに別のものだった。

女子ではない。そこに居るのは、異性だった。

しっかりと落ち着いた声で保奈美が自己紹介を終えても、しばらく誰ひとり雑談するものはいなかった。

教室中のだれもが、言葉を失っていた。

そしてたぶんその時、誰も、もう一人の少年のことは見てなかったはずだ。

姉の影に恥ずかしそうに隠れ、緊張で小さく震えていた華奢な少年の事を。

第4話 幼き争い

外見から受けるの近寄り難さに反して、誰とでも気さくに話をする保奈美はすぐに女子全員と仲良くなった。

女子全員と言っても10人しか居ないのだが。

保奈美の斜め後ろの席の友哉は、まるで授業に集中できず、暇さえあればその長く艶やかな髪の間に見く白いうなじと、耳から顎にかけてのシャープなラインをぼんやり見つめていた。

薄いブラウスの背中に透ける女性ならではの下着のラインに目が行くと、息苦しさを感じてくる。

他の女子達はまだそんな下着を付けていなかった。

そんなに女性的な体のラインをしてもいなかった。

罪悪感が常に友哉の心の隅に警告を与えたが、気がつくといつの間にか目がそちらに行ってしまうのだ。

けれど、そんな思いを抱くのはもちろん友哉だけではなかった。

保奈美をぼんやりと目で追ったり、チラチラと視線を送る男子達の姿は、特に注意していなくても友哉の目に入ってくる。

誰もが落ち着かない。

気持ちの置きどころが見つからず、微妙な時期の少年たちは、たったひとりのその少女に心を乱された。

双子が転入してきて3週間ほどで、その揺らぎはほんの小さな事件を起こした。

男子の一人が保奈美の髪を触った触らないの些細なことが原因で、保奈美の親衛隊と化した女子と、男子との間で対立が始まったのだ。一時的だと思えたその分裂は、それぞれのプライドを保とうとするように、頑ななものに変化して行った。

ボス猿的存在だった富田健吾と数名の男子が、保奈美に何かと辛辣な言葉を浴びせるようになる、始めのうちは田舎ものの男子など相手にしていない様子だった保奈美も、次第に嫌悪感を表すようになっていった。

「どうしてこの男子ってこんなにレベルが低いの？ サイテーね」富田健吾を真正面から見据えて保奈美がそう言うと、富田はその保奈美の細い左腕をグイと掴んで「うるさい、ブス」と、あまりにも脳のない罵声を浴びせた。

次の瞬間、保奈美の右手が驚くほど大きな音を立てて富田の頬を平手打ちした。

教室で帰り支度をしていた誰もがその瞬間を目撃し、そして誰もが富田を失笑した。

もちろん友哉も。

友哉には分かっていた。

富田が本心ではどうしようもなく保奈美に惹きつけられ、どうしてもいにか分らない状態になっていたことを。

羽化が始まったばかりの少年達は、心と体のアンバランスな変化に戸惑い、

未発達な表現力故に、ねじ曲がった衝動に駆られてゆく。

「由宇、さあ帰るよ」

富田を睨みつけたあと保奈美は、教室の隅でただ小さく固まっていた双子の弟の名を呼び、その腕を取るとさっさと教室を出ていった。富田の鋭い視線が二人を後ろから射抜いていた。

いや、二人ではない。

その時すでに焦点は、弟の由宇にだけ当たっていたのかも知れない。

その悲劇の主人公は由宇に配役されたのだ。

友哉はその場面を思い出すとき、いつもそう思った。

第5話 由宇

保奈美と正反対に、弟の由宇は余りにも目立たない存在だった。

保奈美よりも背が低く、更に幼い顔つきの小柄な少年は、とても同じ歳には見えなかった。

それは保奈美が早熟で、とても6年生には見えないと言ったこともあったのだが。

由宇の髪は、まるで色が抜けたような薄茶だった。

目の色もどこかグリーンがかった琥珀色で、それがまた更に希薄な印象を与えた。

対人恐怖症なのか、ほとんど誰とも話をしなかったし、学校では笑うことも少なかった。

ただ保奈美の影のようにぴったり寄り添い、存在を消しているように友哉には思えた。

級友たちも、そんな由宇に話しかけはしなかった。

どうせ2学期には消えている級友だ、積極的に仲良くする理由もない。誰しもそう思っていたに違いない。

友哉自身、別段弟には何の興味も持っていなかった。

あの放課後のイジメを目撃するまでは。

週に一回のクラブ活動のあと、友哉は一人で帰っていた。

学校からは徒歩で40分。

その途中には民家のない寂しい山林部分もあるが、友哉にとっては通い慣れた道だった。

狩られた獣の必死の抵抗の声を聞いたのは、ちょうど民家のない林道だった。

杉林の少し手前の空き地に3、4人の少年が固まっていた。

「何かおるん？」

野ウサギでも捕まえたのだろうか。

本当にそう思っただけで覗き込んだ友哉はハッと息を呑んだ。

富田健吾、そしていつもくっついて太つちよの木ノ下ミツルと、坊主頭の山岸雅也が嫌な目つきで友哉を振り返った。

そして、3人に囲まれるように草の上で丸くなっていたのは由宇だった。

涙で頬が濡れている。

「何やっちよるん」

友哉は訊いた。

状況は一目瞭然だったが、なぜそんなことをするのか理解不能だった。

「何もしちよらん。ふざけちよるだけじゃん。なあ」

富田がにやけながら同意を求めると、二人もニヤリとわらった。

「由宇と遊んじゃってるだけじゃ。友哉も寄せちゃろうか？」

「いらんよ。泣いちよるやん。なんでそんなことするん」

友哉は特に正義感をかざすほうではない。富田達に逆らうと厄介だということもよく分かっていた。

けれどこの時は見て見ぬ振りができなかった。

それはもしかすると泣きはらしている由宇の横顔が、その時なぜか保奈美とダブって見えたからかも知れない。

普段は意識して比べてみたことのない、その顔が。

「こいつさ、女みたいやん？」

ふいに言った木ノ下の言葉に友哉はびっくりとした。

「いつも姉ちゃんにくっついて歩いてやあ、カマみたいやん。なあ、男か女か調べてみんか、友哉」

「アホか。男に決まっちよるやろ！」

にやけた木ノ下の言葉に吐き気さえ覚えて、友哉は素早くうずくまって泣いている由宇の手首をぐいとひっぱり、立ち上がらせた。

状況をよく把握してない由宇は怯えた目を友哉に向け、体を固くした。

「俺は何もせん。一緒に帰ろう。送っちゃるけえ」

由宇の返事も聞かず、友哉は一刻も早くその場から抜け出たくて、その腕をひっぱって歩き出した。

「何格好つけちよるんじゃ、クソ友哉。ばかじゃないん。俺ら、遊んじよっただけやからな！ 先生に言ったら、ぶちのめすぞ！」

後ろでそんな富田健吾の声が聞こえたが、もう振り返ることはしなかった。

ただ、追いかけて来ないことだけを祈りながら友哉は、由宇の腕を強く引つ張って歩き続けた。

奴らは追っては来ない。一方でそんな確信があった。

彼らはもしかしたら、本当にふざけていただけなのかも知れない、と。

由宇は身代わりなのだ。

自分達が触れることの出来ないあの美しい少女の。

友哉は彼らの「遊び」という言葉に、身震いするほどの恐ろしさを感じた。

その恐ろしさが、どこに繋がっているかを考える事すら、恐ろしかった。

ようやく由宇を振り返って言葉をかけたのは、もうあの場所からかなり離れてからだった。

3人の姿も見えず、友哉は気を緩めた。

「あの3人に近づかんほうがええよ。タチ悪いから」

由宇は戸惑ったような目を友哉に向けて小さく頷いた。

その様子はあまりにも幼く弱々しく、きっとこの少年はすべてを保奈美に依存して生きているのではないかと、少しばかり腹が立った。「俺、お前の家知らんから。ここからは一人で帰りや。帰れるやろ？ 姉ちゃんおらんでも」

少し突き放したようにそう言うと、思いがけずに少年は笑った。透き通るような白い肌をほんの少し赤らめ、淡い色の瞳を細めて微笑み、そして「うん、大丈夫。ありがとう」と、きれいな標準語で言いながら友哉を見つめたのだ。友哉の心臓が一瞬トクンと跳ねた。

似ていた。

その目元も、唇も、細い顎のラインも。

胸が苦しくなるほど少年は姉によく似ていた。

なぜみんなは気付かないのだろう。いや、・・・もしかして気付いているのだろうか。

「じゃあな」

素っ気なくそういうと、友哉は由宇を残して足早に歩き出した。ぐるぐると、無秩序な思考が頭をかき乱す。

“腹立たしい”

家に帰り着くまで友哉の中を満たしていたのは、なぜかそんな感情だった。

第6話 苦痛

次の日教室に入ると、友哉の机は無惨にひっくり返され、中に入っていたノートや文房具類が辺りに散乱していた。

誰もが見て見ぬ振りで、いつもどおりに談笑している。

友哉は頭の隅と舌が痺れるのを感じ、同時にこれから過ごすであろう苦い時間を思い、憂鬱になった。

教室の窓際に富田達を見つけ、ひと睨みすると、3人はニヤニヤしながら「バカが」と呟いた。

友哉は無言でその幼稚な仕返しの後片づけを済ませると、居たたまれなくなつて、ふらりと廊下に出て行つた。

なぜか今朝は真つ向から富田たちとやり合うほどの勇気も、気力も湧いてこなかった。

級友たちへの失望もあつたのかもしれない。

廊下の突き当たりに、同じように所在なさに壁にもたれて立っている由宇がいた。

その目は不安そうに友哉を見つめる。

ごめんなさい。

その目はそう言っているように思えたが、友哉はプイと視線を外した。

その日は友哉に話しかけてくる友人も居ず、いつも馬鹿話で騒ぎ立てる連中も、何かを恐れるようにひっそりと一日を過ごしていた。

友哉が富田の逆鱗に触れたのを、誰もが感じていたのだろう。

君子危うきに近寄らず。

俺のクラスメートは皆、堅実だな。

バカらしさに胃が痛くなるのを感じながら、友哉はその日も無意識

に斜め前の保奈美の後ろ頭をボンヤリ見つめて過ごした。

保奈美が友哉に話しかけてきたのは、放課後、みんなが帰ってしまった校庭でだった。

「大村くん、富田達に虐められてるの？」

その「いじめられる」という屈辱感にあふれる響きに、友哉は力チンときた。

保奈美の目の奥の、少しばかりバカにした印象もそれに拍車をかける。

「何で俺が！ 冗談じゃない」

初めてまともに交わした言葉が、こんな情けない言葉になるなんてけれど友哉の気持ちは収まらなかった。

「あいつらは頭がおかしんじや。俺は相手にしちやらん！」

友哉の気迫に少し眉をひそめた保奈美は、もうその事には触れず、すんなり話題を変えた。

もともと、そんな事にはさほど興味がなかったかのように。

「ところでさあ。大村君、いつも私のこと見てるでしょ」

その言葉に友哉の心臓はドクンと音を立てた。

「な・・・なんで」

「授業中ずっと私のこと見てるでしょ。あれ、やめてもらえる？」

気持ち悪いのよ。授業に集中できないから」

友哉は全身が急に熱を持ち、汗ばむのを感じた。心臓がばくばくと脈打ち始めた。

「見ちやらん！ なんで・・・なんでそんなことを・・・」

口がカラカラに渴いて舌がもつれ、言葉にならなかった。

「先生に言って席を変えて貰うことにしたから。明日、席替えになると思うわ。富田達も嫌いだから席を離して貰うことにしたの。悪

く思わないでね」

全身が針で刺されたような痛みを感じた。
貧血の時のように目の前が霞み、息が苦しくてたまらなかった。

この女は、友哉が自分を見つめて来るのが嫌だと担任の女教師に言ったのだ。

もともと、いけ好かなかったあの女教師に。

担任の失笑がたやすく想像できた。

事なかれ主義の担任は『仕方ないわね』とすぐさま承認したのだろ
う。

11歳の男の中にすでに育っている不潔なものを感じて、それを保
奈美と笑い合ったのかもしれない。

頭の中に次々浮かぶ想像が友哉を打ちのめした。

腹立たしくて、情けなくてたまらなかった。

友哉が何も言えずに固まっているのを満足げに眺めた後、保奈美は
飼い犬を呼ぶように物陰に声をかけた。

「由宇、帰るよ」

どこに隠れていたのか、由宇はおずおずと出てきて保奈美の横に並
んだ。

さっきまでの話を由宇は聞いていたのだ。更なる腹立たしさが友哉
を満たした。

自分が虐められたことも、友哉に救われたことも、この少年は姉に
言うてはいないのだ。

そんな僅かばかりのプライドが友哉をますます苛立たせる。

もじもじと立つ、目の前の少年を友哉は睨みつけた。

心底憎かった。

こんなに誰かを殴りつけてやりたいと思った事は無かった。

富田たちにさえ、感じたことのない怒りだ。

「由宇を虐めないでよ！」

友哉の表情を読んだのか、保奈美の鋭い声が飛んできた。

「由宇は病気がちで学校もずいぶん休んだから友だち付き合いがうまくできないのよ。由宇を虐めたら本当に許さないんだからね！」

保奈美の、友哉を見る目はもはや害虫を見る目と同じように思えた。友哉は言葉も出せず、校門を出ていく二人を見送ることしかできなかった。

「畜生！」

鼻の奥がツンとした。辺りの景色が悔しさに歪む。

消えて無くなればいい。

自分も、学校も、級友も、教師も、そして、あの双子も。

友哉は誰も居なくなつた校庭で一人、拳を握りしめた。

第7話 弱肉

梅雨が明け、輝くばかりの新緑の季節になった。

保奈美は相変わらず女子や一部の男子の憧れの的として君臨し、富田達と敵対していた。

保奈美はそんな状況を楽しんでもいるかのように、更に生き生きと輝きを増した。

弟の由宇も相変わらず保奈美の庇護のもと、空気のように存在を消し、

そして友哉はあまり誰とも喋らなくなった。

保奈美もあれ以来友哉を非難することは言わなくなったし、富田もイジメ甲斐のない友哉をターゲットにするのは諦めたようだった。

ただ友哉自信が、正体不明の殻に自分を閉じこめていた。

今まで友だちと笑い合ってたことの、一体何が面白かったのかがい出せない。

その様子に気付いて、逆に保奈美が気遣うように時たま声をかけて来るのだが、友哉は無視した。

あの時のことを怒っているのではなかった。

単純に苦しいのだ。

あんなことがあったにもかかわらず、友哉の中の性は、保奈美を意識から外してはくれなかった。

そのサラサラとした長い髪が風に揺れるのも、その時ふんわり香るシャンプーの匂いも、白い肌も大きな瞳も長いまつ毛も。

ただ友哉を苦しめた。胸が苦しくて息ができなくなる。

だから目をそらし、常に距離を保ち、早く秋になって居なくなってくれと願った。

「保奈美さんは今日からお休みです。出先で転倒し、足の骨にひびが入ってしまったそう。夏休みまでに退院は難しいかもしれませんが」

6月下旬、担任教師が残念そうにそう言った時も、友哉は心配よりもむしろ、どこかホッとした気持ちでいた。

主君を無くした女子達は一様に大人しくなり、マドンナや標的を無くした男子たちは、つまらなさそうに、それぞれの遊びを探し始めた。

刺激を。更なる刺激を。

健全な好奇心や欲望はちょっとした切っ掛けで、ごく自然に残酷な少年期の遊びに変わる。

強烈な夏の太陽に刺激され、獣たちは再び、弱い草食動物を狩る楽しみを見つけた。

「友哉くん！」

短く鋭く甲高い声と共に、何かが後ろから友哉の腰にしがみついてきた。

下校途中だった友哉は、慌てて自分にしがみついて来たものを見た。

「由宇？」

由宇は顔も上げず、ただ力一杯に友哉の腰にしがみついていた。

理由はすぐに分かった。

後から不服そうな顔で富田達3人がのっそり歩いて来たのだ。手には由宇のランドセルをぶら下げている。

「きしよいな、友哉。何二人で抱きおうちよるん。変態やろ、お前ら」

またもや獲物を取られた富田達の不満そうな顔は、次第にニヤけたものに変わっていった。

獲物が一つ増えただけだと理解したらしい。

友哉はため息をついた。

全てが面倒くさい。

ありったけの声を張り上げて友哉は、富田達ではなく、由宇に怒鳴った。

「離れえや由宇！ 何回も俺を頼るな！ 姉ちゃんがあらんようになつたら俺なんか？ 都合良すぎるんやないか？ 少しは自分で自分のこと守れや。俺はお前のお守りなんかせんぞ！」

グイと力一杯由宇の肩を掴んで自分から引き剥がした。

由宇が小さく声をあげて顔を歪めたのに一瞬ひるみ、友哉は改めてその少年を見つめた。

姉にそっくりな大きな瞳は涙をいっぱいに溜め、拒否された衝撃に震えながら友哉を見上げていた。

「何じゃ、友哉もこつち組かあ。ええやん、一緒に遊ぼうや、由宇と」

そう言う富田は由宇のランドセルを傾斜の激しい竹林にポンと転がした。

それは勢いよくコロコロと転がり、細い孟宗竹の間をくぐって、あつと言つ間に見えなくなってしまった。

「あれー。悪い悪い。ちよつと置いたつもりじゃったのに、派手に転がり落ちたなあ」

富田がわざとらしくそう言うのと、木ノ下がグイと由宇の手首を掴んで引き寄せ、今度は急斜面にドンと押しやった。

「早う取って来いや。カバン川まで落ちるぞ。ちゃんと取って来れたら男じゃって認めちやる。取って来れんかったら男じゃないけ、服剥いてここで調べちやる」

由宇は涙を溜めた目でただ、急斜面を見つめていた。
友哉の方を一瞬窺うようにチラリと見たが、今や友哉にも怯え、警戒し、近寄って来ようとはしなかった。

ウンザリだった。

バカな3人も。

ただ弱いだけの少年も。

その少年が、姉に似ていると言うことも。

友哉はゆつくりと、足元に転がっている拳大の石を拾い上げると、バカ3人に向き合った。

「器物損壊、りっぱな犯罪じゃ。それ以上由宇に何かやったら訴えちやる。喧嘩売るんやったら3人でかかってきたらええ。手加減せんけえ」

友哉の声は穏やかだった。

けれどその穏やかさと対照的な冷たい目が富田らを退かせた。

そして何よりも友哉の握っている石が尋常でないものを思わせ、彼らを怯えさせた。

「・・・お前あたまいカレちやるやろ。何ムキになつちよう。アホくさ」

その声にはまるで勢いは無い。

3人が捨て台詞を残して帰って行くのに、そんなに時間は掛からなかった。

富田たちの姿が見えなくなると、友哉は手に持っていた石をようやくポトリと下に落とし、首筋に流れてくる汗を手の甲で拭いた。
そして、すぐ側で自分を見つめている由宇に言った。

「大丈夫。カバン、俺が取ってきちやる。ここで待つとき」

由宇は、ホツとしたように一つ大きく呼吸すると、まるで花がほころぶように満面の笑みを浮かべた。

友哉の中に、何ともいえず温かいものが湧き上がって来る。

あの日感じた怒りは、事も無くさらさらと溶けて消えた。

欠けて尖っていた部分を、何かがやんわりと包んでゆくような感覚。高揚感。

無くしかけた大事なものが、また、この手の中に戻ってきたような気がした。

第8話 不純

富田達が再び仕返しをしてくるのでは無いかと気を張っていた友哉だったが、その気配はなかった。

下手に友哉を刺激して、悪事が露呈してしまうのを恐れていたのかもしれない。

ただ時折、忌々しそうにこちらの様子を伺っているだけだった。

あれ以来、友哉は毎日、放課後になるとポツンと自分の椅子に座ったまま拾われるのを待っている由宇に声をかけた。

「帰るか？」

由宇は友哉に対してだけ、本当に嬉しそうな笑顔を返した。

いつしか友哉は、その笑顔を見たいと意識して思うようになった。

それはもしかしたら、友人を想う、純粋な優しさではなかったのかもしれない。

最初の頃、確かに友哉はあの少年の笑顔の奥にちらつく、保奈美の笑顔を探していた。

保奈美によく似た白い肌。保奈美によく似た美しい顔立ち。保奈美に一番近い体。

不純。

そんな言葉が心の片隅にちらついた。

けれど、気付かないふりをした。

そんな感情を測る物差しなど持ち合わせていなかった。

そんな真実を、知りたいとも思わなかった。

夏休みに入った。

自宅の暗い土間から目もくらむ夏の陽射しの中へ飛び出すと、外で待っている由宇はいつも決まってホッとした顔をして笑った。

初めて友哉の家に由宇が来たときに「勝手に来たって俺も都合あるし、お前と遊べるとかぎらんぞ」と、冷たく言っただのが、いつまでも由宇の中に残っているらしい。

どこかに、血統の良い子犬を手名付けた小気味よさを感じる。

あの高慢知己な保奈美の面影のまま笑いかけられると、少し後ろめたいような充足感があつた。

「川、行くぞ」

そう友哉が言つと、由宇の表情が曇った。

「川には富田君たちがいるよ」

「川うちゅうても遊泳所じゃないよ。もつと上流の滝じゃ。小さい洞窟とかあるし、その源流には俺しか知らん秘密の場所もある。由宇にだけ教えちゃる」

そう言つてやると、由宇は嬉しそうに笑った。

田舎で遊ぶには虫かごが必要とでも思っているのか、由宇は小さな虫かごをしっかりと握ったまま後から付いてくる。その必死な様子に、友哉は自然と笑いが込み上げてくる。

友哉の家の近くには天然記念物に指定された、滝の名勝があつた。

決して大きくは無いが、1キロにも渡つて小振りな滝が幾つも続いている。

最近は水量が減つて見応えが無くなり観光客も減つたが、友哉が生まれる前は九州や関東方面から泊まり客が来るほど、賑わっていたと聞く。

だが、そんな時期を知らない友哉にはピンと来ない。

ここは、静かな静かな、友哉の庭だった。

危険なので遊泳は禁止されていたが、監視員がいるわけではない。雨が少ない時期は水かさも低く、友哉はコッソリ氷のように冷たい

その滝壺で遊んでいた。

その場に立つと、深い緑色の滝壺に白糸のように細く垂れる滝の水の美しさと、夏を忘れてしまうほどひんやりした空気に鳥肌が立つ。初めて見る光景に、由宇は息を呑み、目を輝かせていた。

「由宇は泳げんやろ？ 絶対水に入るなよ。俺、よう助けんし」

「うん。ねえ、向こう岸に洞窟があるね。友哉君、行ったことあるの？」

「ああ、もう行き飽きた。何ちゅうこともないよ。奥行き無いから行っても面白くないし。洞窟じゃなくてただの洞穴じゃけえ。今は水も緩いから歩いて渡れそうじゃけど、急に深くなるし滑るから入るなよ由宇」

「うん、わかった」

ほんの少し日に焼けて赤くなった頬で、由宇は一生懸命頷いた。

他のクラスメートには向けない、友哉だけを信頼して見つめる目。

鬱蒼とした桛やクヌギの葉の木漏れ日の下で、そのサラサラとした栗色の髪が艶やかに光っている。

Tシャツから出た首や手は女の子のように白く頼りなさげだ。

本当に同じ6年生なのだろうか。

誰かの庇護なしには生きられない、生まれたばかりの草食動物のように見える。

その存在が、友哉の中に不思議な感覚を呼び起こしかけていた。

ムズムズとした、高揚感に似た『何か』。

「なあ、由宇。秘密の場所、教えてほしいか？」

友哉がいうと、由宇はクルリとした二重の目を大きくして、友哉を見つめた。

「え、何？」

「この上に水源地があるんよ。山の方から綺麗な水が湧きだしよる。」

すごくきれいな場所じゃ。行ってみるか？」

「うん！ 行く！」

友哉の言葉に由宇は更に目を輝かせて、友哉を急かすように寄ってきた。

「階段が無くなるから滑りやすいし、あぶないからな。離れるなよ」

友哉がそう言つて少し険しい顔を作ると、由宇は細い腕を伸ばし、友哉のＴシャツの裾を握ってきた。

「危ないところ？」

由宇が真つすぐ見つめてくる。

「いいや。ちゃんと俺にくつついとれば怖くない」

そう言つてやると、由宇はホツとしたように頷いて友哉を見た。安心しきつた、すべてをゆだねた目だ。

ああ、そうだ。

俺を見ている。

その綺麗な目で、俺だけ見ている。

第9話 羽化

「わあ……。きれい。鏡みたい」

滝の上流まで行くと、由宇は感嘆の声を漏らした。

トロトロと静かに流れてくる山水と湧水が皿のような地形を作り、そこに満たされた水が鏡のように地上の萌える緑を映して、目も覚めるような景色をつくりだしている。

水の勢いの少ないこの時期、余計にその美しさは際立っていた。

実際そこは危険な場所でもなんでもなかった。

『一雨の滝』という名のついた、ちゃんとした観光コースだった。ただ遊歩道が途中で途切れていて、めったにここまで登って来る観光客が居ないため、友哉が勝手に秘密の場所だと決めただけだ。

「富田達には内緒な」

「うん、言わないよ。二人の秘密だもんね」

由宇はいたずらっぽく笑うと、鏡のような水面にそつと手をかざしたり、足を浸してみたりして遊んでいる。

とつくにそんな遊びに飽きていた友哉は、岩に座り、ただ楽しそうに遊ぶ由宇を見ていた。

転びはしないか、棘のあるギギユウ（魚）に刺されはしないか、少しばかりハラハラしながら。

まるで保護者になったような気分で。

「みてみて！ 友哉君」

ずっと見られているのにも気づかず、声をひそめて由宇が友哉を呼ぶ。

木々の隙間から射す黄緑色の光の下、鏡の水面に立つ由宇の金色に光る頭の上。

スイと飛んできたシオカラトンボが止まった。

「・・・ね？」

由宇が笑う。

まるでそれは、一つの絵のようだった。天使の絵だ。

「ね、って。なんよ。ただのシオカラトンボじゃし」

友哉は、わざとつまらなさそうに言って、感嘆のため息を呑みこんだ。

そのうちその場所にも飽きたらしい由宇をつれ、さっきの場所まで戻ることにした。

今度は何も言わないのに、急な斜面になると由宇の方から友哉の手を握ってきた。

友哉がその行動に少し驚き咄嗟に手を引くと、由宇は特に気にする様子も無く、すぐ横の岩に這う木の根をロープ代わりにした。

なぜ手を引っ込めてしまったのか。

握られた時の、サラリとした感触を思い出し、ザワザワした感情に戸惑いながら友哉は由宇をさっきの場所まで連れて降りた。

巨木がぎつちりと葉を茂らせているので、木の少なかったさっきの場所よりも薄暗く感じる。

由宇はその差が不思議だったのか、しきりに上を見上げている。

姉によく似たその細い顎のラインを何気なく見ていると、急に振り返った由宇が言った。

「ねえ、今度は何する？」

友哉は反射的に答えた。

「泳げんのやったら、相撲でもとるか」

ふざけて言ったのが分かったのか、由宇は笑いながら返してきた。
「嫌だよ僕、勝てっこないもん。友哉君大きいし。・・・あ、でもね、腕相撲ならいいよ。保奈美とやって、僕負けたこと無いんだ」
保奈美の名を聞いて、友哉の胸が微かに疼いた。

あの保奈美が腕相撲なんてするのか？ そんな遊びに付き合ってやるほど、家では仲が良いのだろうか。双子と言うものは、どれくらい親密なものなのだろう。

「あんな女と一緒にすんな」

友哉はグイと由宇の手を乱暴に掴んで引き寄せ、足元にあった程良く頂点が平らな岩の上に肘をつかせた。

由宇がほんの少し不安そうな目を向けてくる。

「保奈美のこと、嫌いなのか？」

「ああ。あんな女、大嫌いじゃ」

「どうして？」

「そんなん知らん！ 嫌いなもんは嫌いなんよ」

言えば言うほど友哉は腹が立ってきた。

「でも、もう会うこともないよ？ 僕らは9月にまた引越すから」

「ああ。せいせいするわ」

「保奈美が・・・あんなこと言ったから？」

由宇の言葉で、一瞬にしてあの苦々しい放課後が蘇ってきた。

カッと体が火照り、怒りが込み上げてきた。

それは保奈美になのだろうか。

それとも、自分と違って全く雄のいやらしさを感じさせない、純粹ぶったこの少年になのだろうか。

「うるさい！ ええか、勝負するぞ由宇。負けたら罰ゲームな」

そう言うと友哉は、握っていた由宇の手を、力一杯左側に倒した。

怒りなのか、もどかしさなのか、後悔なのか、そんなモヤモヤした気持ちを全て腕力に込めた。

鈍い音を立てて由宇の右手の甲が岩に打ち付けられた。

由宇が苦痛に顔を歪め、黙り込むまで友哉はやりすぎたことに気付かなかった。

「ごめん！」

咄嗟に謝った。

けれど由宇は怒るところか、逆に恥ずかしそうに痛めた手を背中に引っ込めた。

「やっぱり、強いね」

そういうと、小さく笑った。

自分が何か怒らせたのかもしれない。

それにおびえるような、弱々しい笑みだった。

二人の会話がぎこちなく途切れ、代わりにアブラゼミの声が音量を増して、木々に反響した。

耳が痛くなるほどだ。

「すごいね、蝉の声」

そう言つて、右手をさすりながら辺りを見渡す由宇。

「僕らが帰る街にはこんな場所ないんだ。ビルとか工場ばかりで。

23階のマンションなんだ。朝起きてても、雨が降ってるかどうかも分からないんだよ。来月、そこに帰るんだ。・・・僕、このこと、ずっと忘れないでいられるかな」

気を遣い、話題を変えようとしてるのだろうか。

由宇はそんなことをぼんやり呟きながら、またぐるりと森の中を見渡した。

「ほら、見て！ 友哉君。蝶が」

由宇がいきなり一点を見て大きな声を出した。

由宇の視線の先をたどると、大きな葉の裏にくっついたサナギから、漆黒に黄の美しい配色を施した蝶が、ゆっくりと羽化を始めていた。こんな場所で蝶が羽化するのだろうかと友哉は一瞬訝ったが、それは紛れもなく、今まさに大人の姿になろうとしているクロアゲハだった。

「初めて見たよ、蝶の羽化。すごいね、友哉君。こんなにゆっくりなんだね。真っ黒できれいだね」

由宇は顔を近づけ、うっとりするように見とれていた。

そして、その隣の枝にもう一つはち切れんばかりに膨らんだサナギを見つけると、更に気色ばんだ。

「友哉君、もう一つあるよ！ これも羽化するよね」

「さあな。こんなところで蝶が羽化するとか知らんよ。そっちの蝶が特別なヤツで、こっちは蛾なんじゃないか？」

ちよつとばかり意地悪にそういうと、由宇は少し不満そうな声を出した。

「そんなことない。きつとアゲハだよ。二匹は友だちなんだ。きつと、この子はもう一匹の羽化を待ってるよ。一匹だけじゃ寂しいもん」

バカバカしいと思いながらも友哉は、由宇のキラキラした目を見て少し羨ましくなった。

自分も2、3年前、目を輝かせて蝶の羽化を見守った事がある。

「じゃあ、これにサナギ入れて持って帰ろうや。蝶か蛾か確かめたらええ」

友哉は由宇が持っていた小さな虫かごに、サナギのくっついた枝ごとそつと入れ、蓋をしめた。

「かわいそうじゃない？」

「なんで」

「寂しがるよ、もう一匹が」

「バカじゃなあ。蝶はそんなん思わんって」

「・・・」

由宇の顔が曇った。

「まあな・・・。サナギっちゅうんは、あんまり動かすと死ぬしな。ここに置いてこう。明日また見に来て、羽化しちよったら、二人で逃がしちやろう？ 見たいんやろ？」

「うん！ そうしよう」

嬉しそうにパツと表情を輝かせると、由宇はもう一度羽化したばかりの蝶を見た。

やっと殻から全身を引き抜き、太陽の光でゆっくり羽を伸ばしながら乾かしている漆黒の蝶は、とても美しかった。

「こっちが友哉くんだ。まだサナギなのが僕だよ」

由宇が、独り言のように小声で呟いた。

その、まるで純粹培養したような優しげな横顔から、友哉は視線を外した。

反らした視線が今度は由宇の赤黒くアザになった右手の甲を捉える
と、堪らずに、友哉は目を閉じた。

第10話 怒り

翌日その場所に行ってみると、夜のうちに降った雨のせいで滝壺の水は少しばかり濁っていた。

けれど友哉と由宇を落胆させたのは、その場に先客が居たことだ。一番会いたくなかった奴らだ。

「何もんくありそうな顔しちょんじゃ友哉。俺らがここにおったら悪いんか？」

木ノ下と山岸を引き連れた富田は、ニヤリとして言った。

「お前らいつつもコソコソ、こんなとこに隠れて遊びよんじゃろ？」
木ノ下も山岸も、富田が側に居るときだけは、自信満々に暴言を吐く雑魚だ。

友哉は吐き捨てるように言った。

「何もコソコソしちょらせん。行こう、由宇」

けれど、由宇は不満そうだ。

「サナギは？」

「あんなもん、いつだつてええやろ？ もう行こうや」

そう言つて由宇の手を取った友哉の後ろから、富田が低く言った。

「仲がええよな、お前ら。友哉は保奈美の代わりにええペット見つけたんよな」

友哉は勢い振り返り、富田を鋭く睨みつけた。

「何ゆつた！」

「ほら、当たつたから怒るじゃ。みんな知つちようで。友哉は保奈美に惚れちようから。でも保奈美は高嶺の花やけ、代わりによう似ちよう由宇で遊びよるつて。由宇にキスでもしたんか？」

言い終わる前に友哉は富田に飛びかかっていた。

湿った枯れ葉の上に突き倒すが、がたいの大きい富田に逆にひつく

り返され、そして勢いあまりもう一回転がった。

その弾みに、至る所に浮き出ている木の根に富田はしたたか頭をぶつけ、鈍い音をたてた。

「このやろう！」

富田に加勢しようとした二人に押さえ込まれそうになったが、闇雲に振り回した友哉の腕が二人の鼻っ柱にヒットし、情けない子分どもはすぐさま脇へ退いた。

しかしボスはそう簡単はいかない。体格の差から友哉はすぐに形勢を逆転されひっくり返され、富田にのしかかれた。

怒りに引きつった顔のまま、富田が友哉に拳を振り上げた瞬間、由宇が金切り声を上げた。

けれども富田を止めたのはその声では無かった。

由宇の声に共鳴するように激しい落雷の音が大地を震撼させた。稲光と同時に轟いた強烈な爆音は少年達を飛び上がらせ、我に返したすかさず降り出した激しい雨が、このままそこに居るのが危険であると警告してくる。

鬱蒼とした木々の葉の天蓋を突き抜けて落ちてくる激しい雨の中、友哉は富田達を睨みながら由宇の手を取った。そして黙って滑りやすい岩や木の根を避けながら、遊歩道までの坂を上りはじめた。

まだゴロゴロと不気味に喉を鳴らす雷を警戒し、まずは由宇を無事に帰すのが先決に思えたのだ。

「由宇！」

まだその場に座り込みながら富田が叫んだ。

「虫かごなあ、向こう側の洞穴の中に置いたけ。お前、取って来いや。大事なんじゃないんか？」

由宇は富田の言葉に体を固くした。

富田は昨日の、あのやり取りを聞いていたのだろうか。まさか、後を付けて来たのか？

友哉は虫唾の走るような嫌悪感を覚えた。

「なあ由宇。怖あて、行かれんか？ お前は友哉にくつついて歩くだけの金魚のフンじゃけ。なんもようせんやろ」

理解に苦しむ言いがかりに困惑し、友哉をチラリと見る由宇。

「バカの言うことは放つとけ！」

言い捨てると友哉は由宇の手を引き、坂を登っていった。

富田を振り返ることはしなかった。

雨に打たれながらも、気違いじみた言いがかりを付けた富田が不気味で仕方なかった。

富田の一連の言動は、ただの幼稚な焼き餅なのではないかと思ったが、そんなことで免罪にしたくない。

そんなことで、友哉が受けた「侮辱」が軽減されはしない。

その腹立たしさは、尚も友哉の胸の奥で煮えたぎり、怒りが手足を冷やしていった。

ただ黙々と足早に、滑りやすい山道を、由宇の手を掴んだまま進んだ。

雨足が弱まり雷鳴が遠ざかると、緊張が解けたのか、由宇がポツリと小さく言った。

ずっと言いたくて仕方なかったのだろう。

「サナギ、・・・大丈夫かな」

こんな時に、何がサナギだ！

「知るか！ どうだってええよ、そんなもん！」

吐き捨てるように言うと、由宇は悲しげに顔を歪めた。

「羽化したのに、虫かごの中じゃ、可愛そうだね。・・・死んじやうかな」

友哉の中で、何かがブチンと切れた。掴んでいた手を、乱暴に振り払う。

「俺がカゴに入れたから悪いんやろ？ そう思ったらそう言えや！

ムカツク喋り方すんな。そんならお前が行つて、カゴ取つて来いや、金魚のフン！ だいたい、全部お前のせいじゃ。お前らが来るまで、俺はなんも普通にしよつたんじゃ！ なんもいらん事考えんと、楽しいしよつたんじゃ！」

友哉は早口で捲し立てると、青ざめた由宇を睨みつけた。

それが、富田のそれよりも馬鹿げた嫌がらせであり、逆恨みなのだと気付いていても、堰を切ってしまった怒りは止められなかった。ジワリと目頭が熱くなり、涙が滲んできた。

いやらしい。汚らわしい。自分の中にあつた感情を富田に見透かされた。あざ笑われた。

悔しいくて腹立たしくて、何に怒りをぶつけたらいいのかわからなかった。

「全部、お前らのせいじゃ！ お前らなんか、来んかったらよかつた！」

雨はもう止んでいた。

再びムンとした気持ちの悪い熱気と土の匂いが肌を包み込む。

一つ息を吸って少し我に帰った友哉の目に映つたのは、ただ困惑して、青ざめた由宇の姿だった。

全身ずぶ濡れで、その頬に伝うのが雨水なのか涙なのか分からない。小刻みに唇が震えている。

友哉は、ただその姿を見つめた。

まだ気持ちをコントロール出来ずにいる友哉には、ただ無言で見つめる他に、どうしようもなかった。

自分の口から出てしまったのが本心なのか、そうでないのかも分からない友哉には。

ただ、その悲しげな姿が、目に焼き付いて離れない。
今もだ。

それが、記憶の中の、由宇の最後の姿だった。

第11話 喪失

由宇がいなくなった。

翌日、大人達が大騒ぎし始めたのを知ったとき、友哉は全身を突き刺すような戦慄に襲われた。

それは紛れもない恐怖だった。

咄嗟に浮かんだ恐ろしい想像を頭を振って必死に否定するが、その妄想はじわじわ精神を浸食してくる。

信じない。何かの間違いだ。自分は何も知らない。関係ない。ただそれだけを心の中で叫んでいた。

早朝、滝の方へ歩いていく由宇を見たという老人の話を元に、消防団や地元の青年団が総出で必死に滝の周辺や山道を搜索したが、夕刻になっても見つからなかった。

搜索は二手に分かれており、片方では昼過ぎに、川底をさらえる作業に切り替わっていた。

昨夜降った雨は不気味に水を濁らせ、大人でも流しそうに勢いを増している。

「ちがう。ちがう！」

友哉は小刻みに震えながら、長い竹竿で滝壺や下流の川の澱みを探し回る大人達を、他の野次馬の子供達に混じって見つめていた。

『そんならお前が行って、カゴ取って来いや！』

友哉はそう、あの少年に言っただ。

けれど、いくら由宇が何も知らない街の子でも、大雨の翌日のあの滝壺を横切ることがどんなに危険な事か、少し考えれば分かるはずだ。分からなかったとしたら、あいつが馬鹿なんだ。

いくらそんな風に思っても、友哉の指先の震えは止まらない。

舌が痺れ、からだ全体まで震えてくるのを感じながら友哉は、竹竿

をザクザクと水に突き立てつつ川下に移動していく大人達を、ただ呆けたように見つめていた。

彼らが場所を変えて見えなくなると、友哉は一人、まだ流れの速い滝壺に飛び込んだ。

水の少ない日ならば、立ったまま容易に渡ることが出来るが、今日はそうはいかない。

浅瀬を歩いて渡り、下の崖に落ちるリスクを考えれば、深みに飛び込んで泳いだ方が安全なのだ。

今日のような流れでも、反対側に渡るのは友哉にとって訳もなかったが、もし由宇だったら、押し流され、足を滑らせて、下の岩場に打ち付けられてしまいかもしれない。

そんなこと、あつてはならない。絶対にあつてはならない。

友哉は、ずぶ濡れになりながら水から上がり、足をもつれさせ、目の前の大きなドーム状の洞穴へ飛び込んだ。

そこに居てくれと願いながら。

けれどそこにあつたのは由宇の小さな虫カゴだけだった。

奥行き5、6メートルほどの薄暗い中に、ボンヤリと浮かび上がったブルーの虫カゴ。

それにゆっくり近づいた友哉の心臓がトンと跳ねた。

フタが開いている。

そして、そっと入れて置いた枝には、すでに抜け殻になったサナギがぶら下がっている。

蝶は羽化したのだ。

羽化したのにカゴの中じゃあ、かわいそうだと由宇は言った。

まさか、そのためにここまで来て、フタを開けたのか？ フタを開

けて、蝶を逃がしてやったのか？

信じられない思いで友哉は力ゴを持ち上げた。

「こんな事しに、何でここに来たん？ 由宇」

震えた声が、薄暗い洞穴に響き渡った。

『こつちが友哉くん。まだサナギなのが僕だ』

夢見るように言った由宇の声が蘇ってきた。

『二匹は友だちなんだ。あの蝶はきつともう一匹の羽化を待ってるよ。一匹だけじゃ寂しいもん』

込み上げてきていた感情が、急激に恐怖に変わった。受け入れられない現実、恐怖でしかなかった。

友哉は虫力ゴを振り上げ、闇の奥に力一杯投げつけると、来た方向へ走り出した。

今、はつきりと分かる。“ 由宇は、帰る途中で流されたんだ ”

「ちがう！ ちがう！ 俺は知らん！ 俺は関係ない」

全てが恐ろしく、全てを否定したくて友哉は叫んだ。

再び水の中に飛び込み、反対岸に飛び上がり、無我夢中で走った。

途中で鮮やかな黄色のアゲハ蝶が目の端に映ったが、それさえも恐怖を増長させ、友哉は家へ辿り着くまで走り続けた。

三日三晩、警察や消防団が山や崖や水底を探し回ったが、由宇の体は見つからなかった。

そのかわり、その朝由宇が履いていたサンダルが、滝のすぐ下流の川で見つかった。

それが物語る事実、一縷の望みをかけていた人々を悲しみの底に突き落とした。

友哉は口をつぐみ、家から一步も出なかったが、大人達の目には友

だちを失ってショックに苛まれている可愛そうな少年として映ったことだろう。

友哉は自分の狡さを呪った。

けれど他にどうすることも出来なかった。ただ、あの日のことを無かったことにしたかった。

あれはただの思い違いだ。あの日のやり取りは、本当は無かったのだ。記憶違いなんだ、と。

それは富田たちも、全く同じだったらしい。

あの三人も口を閉ざし、まるで人が変わったように大人しくなった。

「忘れるんだ」

それは暗黙の了解だった。

狡くて弱くて無力な少年達の心は、由宇という少年の存在を忘れ去ることで保たれ、生きながらえてきたのだ。

「友哉？ 裸で寝ちよつたらいけんよ。ほれ、服着いや。風邪ひかして帰したら、あんたのお母さんに怒られるけん」

覗き込むように言った祖母のカナエの声に、友哉はハッとして飛び起きた。

ボーッとした頭で辺りを見回す。早朝に起きてきて、そのまま居間で二度寝してしまつたらしい。

じわりと、昔の夢を見ていたことを思い出した。長い夢の余韻が、再び友哉の胸に疼きを与えた。

あの夏から9年が経つたというのに。

誰にも責められず、誰にも真実を伝えず、けれどもずっと罪の意識に縛られ、鎖で繋がれているように感じ続けた苦い日々。

自分はなぜまたここに帰って来たのだろう。

自分の罪を確認するためだろうか。

それとも、あれはただの幼い言葉のやり取りで、罪なんかでは無いことを自分に思い出させ、植え付けるためだろうか。

あるいは、由宇は死んではない。まだ生きて、ここにいる。そう思おうとしているのだろうか。

第12話 同窓会の夜

廃校直前の校舎を眺めながら行う同窓会は、その日の夕刻から始まった。

地元の連中は毎年駅近くの居酒屋に集まって小さな同窓会をやっていたが、友哉はもちろん、その熱心な誘いを断っていた。

初めて同窓会に顔を出した友哉を、旧友たちは優しく迎えてくれた。とはいえ、その日の出席者は友哉を入れて16名。そして恩師が2名だけだった。

富田達の姿もない。友哉はその事に正直ホッとした。

世話好きのメンバーがせっせとバーベキューを焼く間、出席者はピアガーデン風にセッティングされた席に座り、あるいは立食しながら、それぞれの近況を報告し合った。

「久しぶりじゃなあ、友哉。もう来てくれんのかと思っちゃったけど、会えて良かったよ」

昔から世話好きだった元学級委員の高山圭太は、今回の幹事だった。高山と話しているうちに、わりと仲の良かった4、5人が、懐かしそうに友哉を囲んだ。

体つきは皆ごつくなっていたが、面影は9年前と変わっていない。たわいもないわだかまりは、じんわりと溶けて無くなっていった。友哉はホッと心が和むのを感じた。

「祖父母がまたこっちに引っ越してきたからね。ちょうどタイミングが良かったんだ。声を掛けてくれてありがとうな」

意識したわけではなかったが、方言が出てこなかった。けれど旧友たちは気にする様子もない。

「そう言えばなあ、富田も帰って来ちよるから、声かけたんじゃないけ

どな。気が向いたら来るって言いよつたのに、顔出さんなあ。山岸も木ノ下も、地元におるのに来たことないんよ」

高山が残念そうに言ったが、友哉は胸をなでおろした。

出来るなら、彼らとは話をしたくなかった。たとえ、何気ない世間話でも。

「俺なあ、駅前で今日、富田見たんよ。なんかヤクザな格好しちよったわ。相変わらず借金こさえてウロウロしちよんやろうな。木ノ下が困つちよったわ。金貸してくれて、頼つて来るつちゅうて」
昔よりも、でつぷりと太った北浜テツヤが苦笑いしながら続けた。
「ほいでな、観光客みたいなメチャクチャべっぴんの女に声掛けられよつてよお。焦りまくつて道、教えちよったわ。可笑しかったぞ。未だにあいつは女にモテンのやろうな。スケベが顔に出ちよるから、女に嫌われるんよ。昔も保奈美つちゅう子に散々嫌われちよつたじやん」

そこまでニヤニヤして聞いていた友人達は、保奈美の名が出ると、急に表情を曇らせた。

北浜も、しまったとばかりに言葉を詰まらせる。

友哉は、努めて平静を装い、穏やかに話題に入り、北浜を助けた。

「そうか。富田も帰つて来てたんだな」

「うん。・・・それにしても、美人やったなあ。真つ赤なワンピースでなあ、女優みたいじゃった。声、掛けたら良かったかなあ、俺」
「結局、女しか見ちよらんじゃ、テツヤは」

高山が北浜に突っ込むと、皆、可笑しそうに笑った。

それぞれが、由宇と仲の良かった友哉を気遣い、そして9年前の悲しい出来事に胸を痛めていたのが友哉には伝わって来る。

聞こえないふりをしていたが、始まってすぐの時間、友哉と少し離れた場所で女の子たちが由宇の話をしているのが聞こえていた。

あの事故から2年後、由宇の生還をあきらめた家族が、東京の父親の実家でひっそり告別式を行ったという。

式の正式な知らせも来ず、この学校から参列したものもいなかったらしい。

「友哉君、・・・参列したかったんじゃないのかな。仲よかったもん・・・」

女の子たちがしんみりとそう言った。

旧友たちは、皆優しい連中ばかりだった。

歪んでいじけて、拒絶していたのは自分のほうだった。今も、9年前も。

したたかに酒を飲み、旧友達と語り合って校舎を後にした頃は、1時を過ぎていた。

車で送って行こうという友人の誘いをやんわり断り、友哉は酔いを醒ますように一人、寂れた商店街を歩いた。

田舎の深夜は相変わらず人っ子一人歩いておらず、呆れるほど寂しげだ。

飲み慣れない酒のせいで急にのどが渴いた友哉は、ポツンと立つ自動販売機に近寄り小銭を出した。

それと同時に、街灯の光に引き寄せられた大きな蛾が、ピタリと販売機のボタンの上に止まった。

大人の手の平ほどもある、ベージュのグロテスクなヤママユガだ。

その時、友哉の後ろで、何かに驚いたようなくぐもった声が聞こえた。

咄嗟に振り向いた友哉の顔が強ばる。

そこにはあの青年が立っていた。

ここに来たあの日、友哉にぶつかりそうになった、由宇によく似た青年だった。

「うわあー、でっかい蛾ですね。こんなの初めて見ました。蝶は好きなんだけど、蛾は怖くてダメなんです」

青年は心底おびえたように、けれど愛嬌たつぷりに笑った。とてもきれいな標準語だ。

友哉が固まったように見つめていると、青年は困ったように懇願してきた。

「申し訳ないんだけど、代わりにお茶、買ってくれませんか？」
そう言つて友哉に小銭を差し出して来た。

「あ・・・ああ・・・、いいけど」
思わず声が少し上ずってしまふ。

友哉は小銭を受け取ると、蛾が止まっているすぐ横のボタンを押し、お茶のペットボトルを取りだして青年に渡した。

青年は友哉の手からペットボトルを受け取ると、「どうもありがとう」と、微笑んだ。

ほんの少し触れた手が熱を帯び、心臓の鼓動が速くなる。

友哉はその青年の目をじっと見つめた。無遠慮なほどに。

けれど青年は特に不快に感じた様子も無く、サラリとした茶色っぽい髪をかき上げた。

そして、優しく友哉の目を見つめ返すと、「僕は・・・そんなに貴方の昔の友人に、似ていますか？」

と言つて、少し悲しげに微笑んだ。

第13話 あの世界へ

体中が総毛立ち、友哉はその場から逃げるように走り出した。

青年が何か言いたげにこちらを見たのが目の端に映ったが、振り向くことなど出来なかった。

何が怖いというんだ。

何を怯えているんだ。

冷静になろうとするのだが、途中から街灯もまばらな薄暗い山道の中で、友哉は気を失いそうなほど激しい動悸に襲われた。

呼吸が苦しくなり、何度も立ち止まっては体を折り曲げて息をつき、再び走った。

家に辿り着くと、アルコールがまわったことも拍車をかけ、トイレで何度も吐いた。

「何だっつてんだ。ちょっと似てるだけじゃないか。馬鹿じゃないか、俺は・・・」

いろいろ考えすぎて、赤の他人が由宇に似て見えただけのことだ。そう自分に言い聞かせ、なんとか気持ちに折り合いをつけると、友哉は数回体にぬるい水を掛けただけで、そのまま薄い肌布団の上に転がり丸くなった。

もう一晩泊まるはずだったが、明日には家に帰ろう。そう思いながら。

「もう帰るんか？ 友哉。もう一晩泊まって行きやあええのに」
荷造りしていると、少し寂しそうにカナエがそう言った。

「うん。ごめんな、ばあちゃん。早めにもどるよ。大学のレポート

も溜まってるし」

「そうか……。じいちゃん、畑で野菜もいどるけ、もうちょっとおってくれるか？」

「午後の便にするから、あと2、3時間、そこらへんで時間潰すよ」
寂しそうなカナエには申しわけ無かったが、もう長居するつもりは無かった。

同窓会に出て、昔の仲間達とのわだかまりも解れた。自分の用事はほぼ終わった。

あと、やり残したことがあるとすれば……。

友哉は、まだ陽射しの厳しい外へゆつくり歩み出た。

家の前を走る県道から逸れて、山の方へ続く細い遊歩道へ足を向けた。

やり残した事があるとすれば、あの場所へ行つて、手を合わせることにくらいだ。

昨夜、同窓会で由宇の告別式の事を聞いた時、そうしようと思った。けじめとして。

けれどその細い薄暗い道を見てしまうと、なかなか足が前へ進まない。

同窓会後の出来事が、ブレーキに拍車をかけた。

自分の中にある恐怖は、まだ少しも薄らいではいなかったのだ。

幾分陽射しはマシになったが、まとわりつく暑さとアブラゼミの聲が頭をボーッとさせる。

昔はこんな暑さ、何でもなかったはずなのに。

友哉はゆつくり、ゆつくり、その小道を下った。

小さな小川に掛かる橋を越えたあたりで急に上り坂になり、そこに自治体が観光地のシンボルに作った小さなケルンがある。小さな頃、登つてよく怒られた。

そこから険しい道になるという印だよ、と、母に教えられたことが

ある。

今では「スイスじゃあるまいし、ふざけたもんつくったな」と、笑ってしまうのだが。

友哉はぼんやりケルンを見上げた。

“もう、いいよね。由宇。ここまでで・・・”
そう思いながら。

「この先には、滝があるんですよね」

ふいに、ケルンの裏側から声がした。

ハツと我に返った友哉の前に、いつからそこに居たのか、昨日の青年が立っていた。

友哉は一瞬ドキリとしたが、昨夜とは違う眩しい光の中で見るその人物は、少しも奇妙な感じはしない。

健康的な、屈託のない笑顔だ。

さらさらの薄茶の髪、あまり日に焼けていない肌に白いＴシャツとジーンズ、スニーカー。

確かに由宇によく似てはいるが、ただそれだけなのだ。

顔立ちはやや幼いので、友哉よりもかなり年下なのかも知れない。

19・・・いや18くらいか？

だとしたら、（あたりまえなのだが）由宇ではない。

「ええ、ありますよ。滝が」

友哉が無表情で言うと、青年はニコリとした。

「行きましようよ、滝を見るに」

「え・・・俺も？　なんで」

「貴方も行こうとしてたんじゃないんですか？　だったら一緒に」

「いや・・・俺は別に。それに、時間が・・・」

「少しいいんです。一人じゃ寂しいじゃないですか。だから、ね？　一緒に行きましよう。あの滝へ」

青年はニコリと笑うと歩き出した。

“あの滝へ？”

青年はすでに、鬱蒼とした木々のトンネルをくぐって、影になりつつある。

友哉は突然、弾かれたように青年の後を追った。

そうしなければいけない、そんな思いに取り憑かれていた。

景色は9年前とまるで変わっていない。まるで時間があの時から動いてないかのようだ。

ひんやりとした空気を吸いながら、友哉は青年の後ろ姿を追った。毛細血管のように木の根の這う地表を踏むと、その上に積もった落ち葉がシャラシャラと軽い音をたてる。

右下に流れる大小の滝の音が、さらさらと耳に流れ込み、時間があの夏へ巻き戻されたような錯覚に陥った。

友哉は、ただ、目の前を軽やかに歩く、ほっそりとした影を追った。走るでもなく、声をかけるでもなく、ただ追った。

そして、やっとその背が手に届くところまで来たとき、そこは「あの場所」だった。

水量が少ないせいで、滑り落ちる水の白糸はとても細く、滝壺の色は恐ろしいほど深いエメラルドグリーンだ。

青年が少し小首を傾げて友哉を振り返った。

「誰なんだ？ あんたは」

友哉はもう、堪らずに訊いた。ふと思ったのだ。

もしかしたらこの男は、自分が由宇に似てるのを利用して、俺をからかっているのでは無いだろうか。

逆に、そうであってほしい、と。

「誰だと思えます？」

青年は笑った。

笑うと更に幼く、高校生くらいに見える。

「ただの、観光客ですよ」

青年はゆっくりと周りを見渡したあと、再び友哉を見て、「なんてね」と、また笑った。

友哉は眉間に皺をよせた。

「僕が誰なのか知りたいですか？ 教えてあげてもいいですよ」

青年はもう微笑むのをやめると、右手をスツと友哉の胸の前へ差し出した。

一歩も引かず、友哉はさらに険しい表情をして青年を睨んだ。蝉の声が音量を増してゆく。まるで何かの合図のように。

「腕相撲しましょうよ。僕に勝ったら、教えてあげます」

ザワリと木々が動いたように思ったのは、気のせいだろうか。友哉は息をするのも忘れ、ただじつと青年が差し出してきた、細い指を見つめた。

第14話 誰？

「ねえ、ほら早く、早く」

しびれを切らした子供のようには青年は友哉の右手を握り、足元のテール状の岩に肘を付くようにしやがみ込んだ。

偶然だとは思えなかった。

それは、友哉が由宇と腕相撲した岩だ。

友哉はしやがみ込みながら、呆然として正面の青年を見つめた。

友哉と目があつた瞬間、なぜか青年は一瞬苦痛に顔をゆがめたように見えたが、すぐさま隠すようにその顔を伏せた。

「なんで・・・腕相撲なんか・・・」

友哉が訊くと、青年はすぐに表情を元に戻した。

「いいから、いいから。さあ、始めるよ！ レディ、ゴウ！」

そう叫ぶと青年はグツと右手に力を入れてきた。

「誰なんだよ、お前！」

疑問と不安とが混ざり合つた不快さ。

友哉は急に腹立たしさを感じ、右手に思い切り力を入れ、自分よりも頼りないその手を力一杯握り、右側に叩きつけようとした。

けれどその瞬間、びくりと痙攣し友哉は動きを止めた。

あの日、自分が岩に叩きつけた由宇の手の甲の、痛々しいアザが脳裏に蘇ってきたのだ。

行き場のない憤りを、何の罪もない由宇にぶつけ、傷つけた。

今の自分は、あの時の自分と何か違っているだろうか。

友哉は力を抜き、今対峙している青年の目を見つめた。

色の薄い、少しグリーンがかった琥珀色の瞳だ。

由宇の瞳だ。

友哉の腕から完全に力が抜けた。

青年は無表情のまま、たいして力を入れずに、友哉の右手をパンと岩の上に倒した。

「君の負けだ」

青年はスツと立ち上がると静かに言った。

「だから僕が誰なのか、教えない」

友哉はしゃがみ込んだまま青年をぼんやり見上げる。

「お前、・・・誰なんだ」

語尾が震えた。

「ずるいな。教えないって言ったのに」

青年は可笑しそうにカラリと笑い、続けた。

「そうだな・・・。じゃあね、今から僕が独り言を言うから、君はそれを聞いていてくれる？ いい？」

青年はまるで一人芝居を演じようとする役者のように落ち着いた笑みを浮かべ、まだ座り込んでいる友哉を見下ろした。

いつしか青年の言葉は、よそよそしい敬語ではなく、友だちのような柔らかい口調に変わっていたが、友哉はその変化に気付かない。

たった一人の語り部に、たった一人の観客。

青年は、友哉の返事を待たずに、物語を読むように語り始めた。

「9年前のあの日、由宇という少年は、まだ明け切らない早朝、この滝壺を渡って向こう側の洞穴に行ったんだ」

第15話 漆黒の蝶の羽の下で

青年は優しい、澄んだ声で続けた。

「夜中に降った雨のせいで、きつと今より水かさは高く、流れも急だったはずだ。足を滑らせれば、更にこの下の滝壺か、運悪ければ尖った岩場に叩きつけられる。そんな怖さもあつたけど、少年は真っ直ぐ前だけ見て水の中に入ったんだ」

「どうして！」

友哉は叫んだ。

この青年が由宇であるはずは無いのだが、そう訊かずにいられなかった。

自分がおかしいのは認めていた。誰かに訊きたかった。誰でもいいから、答えを教えてほしかった。

「どうして？ 由宇は君が好きだったからだよ。友だちになりたかったんだよ」

「だから、どうしてだよ。そんなことしなくたって、俺たちは・・・」

「

「本当の友達になりたかったんだ。姉の身代わりじゃなくて」

友哉はビクリとして固まった。

「ごめんね、責めてるんじゃないんだ」

青年は悲しそうに微笑んだ。

「ただ、由宇はどうやってたら君と仲良くなれるかを必死に探してたんだよ。きつとね。本当にそれだけなんだよ。勇気を出すこと。あそこへ行つて、羽化した蝶を見ること。そして、逃がしてあげること。それが由宇には大事なことだったんだ」

友哉は、静かに深い水の底を覗き込む青年の横顔を見ていた。手が痺れたように冷たくなり、鼻の奥がツンとした。

「俺が・・・俺がちゃんと止めなかったからだ」

そう呟くと、堪えきれずに友哉の目から涙があふれた。

青年はゆっくりと友哉を振り返る。

「君のせいじゃないって言っただろ？ 誰のせいでもない。よくある子供同士の戯れだよ。ただあの少年はそうしたかったんだ。幼すぎたんだ」

「俺がちゃんと止めなかったからだ。そんな危ないことするな。由宇は大事な友だちだからって！」

友哉は次第に堪え切れなくなり、震える声を張り上げて、そこにいるはずもない由宇に叫んだ。

「ごめん！ ごめん、由宇！」

9年間、せき止められていた涙が一気にあふれ出した。

そして、初めての謝罪の言葉が友哉の口から吐き出された。

そうだ。自分は由宇に、一度も謝っていない。

友哉は今初めてその事に気づき、雷に打たれたような衝撃を受けた。自分は謝っていない。そして、由宇のために、涙を流してもいない。ああ、なぜ・・・。

いつだって、その事実から逃げることしかしなかった。

正当化し、あるいは無かったことにしようとした。

友哉は涙の溜まった目で唇を震わせながら、自分の醜さを懺悔するように青年を見つめた。

青年は優しく微笑んだ。

「もう、いいんじゃないかな。もう充分だよ。君が苦しむことを、由宇は望んでいない。君の中で由宇は、常に痛みの塊だろ？ 思い出すことは苦痛でしかないんだろ？ 忘れてしまいたいとさえ思う。」

そんなのって辛いじゃない。悲しいよ。由宇は大事な友だちだった。ただ、それだけでいいんだよ」

友哉は涙の止まらない目で青年を見つめた。

「でも・・・」

「ただの悲しい事故だったんだ。誰のせいでもない」

風のように優しく言う青年を見ながら、友哉はあふれ出す寂しさに顔を歪めた。

・・・寂しい。寂しい。悲しい。どうして？ どうして君がいない？ なぜ死んでしまった？

青年は寂しそうに、けれども優しく友哉に微笑んだ。

“君は・・・だれ？”

友哉が再びそう口を開こうとした瞬間、青年はふと何かに気が付いたように、ほんの少し視線を水面に移してその方向を指さした。

「ほら、友哉くん、蝶だ。二匹いるよ。友だちだね、きっと」

友哉はその指さす方を振り返った。

水面の少し上、木漏れ日の中を二匹の漆黒のアゲハ蝶がヒラヒラと戯れながら舞っている。

その姿はとても優雅で美しく、楽しげだった。

『二匹は友だちなんだ』

ああ、どうして。

どうして今までの優しい少年のために涙を流してあげなかったんだろう。

由宇はこんなところに一人で、どんなに寂しかっただろう。

友哉は流れる涙を拭うこともせず、戯れる蝶を目で追いつけた。上になり、下になり、エメラルドグリーンの水の上を、楽しげに舞う。

・・・あの日、由宇が解き放った蝶は、あんなふうに空へ飛び立つだろうか。

先に羽化した蝶と、出会えただろうか・・・。

サワサワと揺らめく水面の幻想を、胸を締め付けられながら見つめた後、友哉は後ろに居るはずの青年を振り返った。

けれど、そこにはもう、誰もいない。

友哉を包み込んでいるのは、ただ色濃く息づく手付かずの自然と、鳴き止まぬ蝉の声ばかりだった。

友哉は涙で喉をひくつかせながら、ゆっくり辺りを見回した。

青年が消えてしまった事は友哉にとってごく、あたりまえの事に思えた。

彼は、由宇ではない。由宇がここに眠っているのは、紛れもない事実なのだ。

もう、現実から逃れようとするのはやめよう。

ただ彼は、大切な事を伝えに来てくれた『何か』なのだ。頭がどうかしてしまったのかもしれない。

けれど、その不思議を追求するよりも、もっと大事な事があるように思えた。

友哉の視線は再び何かを探すように水面を漂った。

不意に、ふわりと頬を撫でていく風が笑った。

心が再び震えた。寂しさが波のように胸を塞いでくる。

“ねえ、由宇。・・・由宇。寂しいんだ。

寂しくて辛くてしかたないんだ。

どうしたらいいのか分からない。
ずっと。ずっとだ。

こんなに月日が経ったって、変わらない。
忘れようとするのに、君の笑顔が忘れられないんだ。
俺を呼ぶ声が、耳から離れないんだ。

でも、それが俺への罰ならば、俺はこの痛みをずっと抱いて生きていく。

思い出の君を、いつも抱きしめて生きて行く。
ねえ、そうすれば君は、俺の中で生き続けられるよね。
ずっと一緒だよ。

ごめんね。今まで逃げてて。
もう逃げないから。

君からも、自分の罪からも。

ねえ。君に伝えられなかった事があるんだ。
今なら届くよね。

君のことが、好きだったんだ。
誰かの身代わりなんかじゃない。
本当に、君が、好きだった。”

大きく息を吸い込んだあと、友哉は溜まっていた心の澱を吐き出した。

そしてまだそこに戯れている二匹の蝶を再び見つけると、友哉は頬を濡らしていた涙を手で拭い、静かにつぶやいた。

「来年も、再来年も、その次も。毎年ここに来るからな。いっぱい、いろんな話しちやるよ。そしたら・・・もう寂しゅうないやろ？
待っちよってな、由宇」

再び頬を熱い涙が伝うのを感じた。

やっと友哉にとっての、本当の時間が流れ始めた。

最終話 エピローグ。ホームにて

閑散としたローカル線の無人改札駅のホームには、その二人の男女以外、誰もいなかった。

20代半ばと思われるスタイルのいい女性は、ハンカチでパタパタと自分の首筋に風を送りながら、電車が来るはずの方角をじっと見ている。

淡いブルーのチュニックが涼しげだ。

側に立っている18、9の少年は、ふいにイタズラっぽい微笑みを浮かべて女に近づいた。

「今日もあの真っ赤なワンピース着られたら、どうしようかと思っ
たよ。ハワイのビーチに來た訳じゃないんだからさ、あんなに目の
チカチカする服はやめた方がいいよ、美沙。目立つし」

美沙と呼ばれた女は声の方を振り向くと、持っていたハンカチでその少年の細面の頬をパンと叩いた。

「生意気言うわね。いつからあんたは人の服装をチェックするようになったのよ。あのワンピースはねえ、友達のブティックで無理やり買わされてから一度だって着たことが無かったのよ。高かったのにさ。金魚かつてくらいに赤いじゃない？ どこに着て行けっというのよ。腹立たしいからここで着てやったのよ」

美沙はまたパタパタとハンカチを振る。

「美沙のムシャクシャの対処法は、よく分からないね」

少年は面白そうにクスクスと笑った。

美沙は屈託なく笑う少年にチラリと視線を送ると、そのサラリとした少年の栗色の髪を、手入れの行き届いた指先で軽く摘んで引っぱった。

「あ…」

珍しく自分にちよっかいを掛けてきた事に驚いた様子で少年が振り向くと、美沙は眉間に皺を寄せて言った。

「分かってると思うけどさ。あんまり他人に余計なことするんじゃないわよ。自分で自分の首を絞めるようなことは、もうやめなさいね」

厳しく、冷たい声だ。

少年はじつと、その淡い色の目で美沙を見つめた後、ただニコツと笑った。

了解とも、反発ともとれる笑みだった。

陽炎にゆらめきながら、くすんだグリーンの列車が静かにホームに滑り込んできた。

「やっと来た」

バッグを持とうとした美沙がすっかりハンカチを落とすと、少年はごく自然な動きでそれを拾おうと手を伸ばした。

二人の指先が触れそうになったとき、美沙はあからさまに眉間に皺を寄せ、手を引っ込める。

少年は笑った。

「相変わらず露骨だよ、美沙は。僕はバケモノじゃ無いんだから」
美沙はハンカチを拾うと体を起こした。

「あんたはバケモノよ」

辛辣にそう言うと、美沙は自分のボストンバッグを持ち上げ、開いたドアから列車に乗り込んだ。

「ひどいこと言う」

特に気にする風でもなくカラリと呟くと、少年も自分のバッグを肩に掛け、美沙の後を追ってドアの中に消えた。

けれども少年は気付かない。そう言った美沙の胸が、ナイフで刺されたように痛んだ事を。

二人を飲み込んだグリーンの列車は、ゆっくりドアを閉めた。

この3日間、ずっと彼らを包み込んでいた耳鳴りのような蝉の聲が、やっと消えた。

(E N D)

最終話 エピローグ。ホームにて（後書き）

この少年が、13〜15話の（青年）です。

彼が、どんな少年なのか、おわかりいただけたでしょうか。きっとまだ、すっきりと分からない方が多いと思います。

実は、この「呵責の夏」というのはサブタイトル。

『KEEP OUT』シリーズの第1弾です。

次回から、この「呵責の夏」の友哉の物語と平行し展開された、全く別の物語が始まります。

あの3日間に起こった、もう一つのドラマをお楽しみ下さい。

彼らこそ、これから始まるKEEP OUTシリーズの主役たちです。

次回、『KEEP OUT2 少年春樹』を、宜しくお願い致します。

さあ、時間を、友哉がこのホームに降り立った、3日前の、あの時間まで巻き戻してください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7790q/>

KEEP OUT 呵責の夏

2011年3月10日12時50分発行